黒き獣を纏いしもの、魔法先生の世界へ

レイチェル＝アルカード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒き獣を纏いしもの、魔法先生の世界へ

【Ｎコード】
Ｎ１７７７Ｔ

【作者名】
レイチェル＝アルカード

【あらすじ】
作者、自爆？の三作目です
基本的には、ネギま！がメインですが、色々な他作品の武器やキャラが（作者の気分で）増えるかもしれません
※更新速度は、かなり遅いｏｒバラバラになります
～現在、ＢＬＡＺＢＬＵＥ編終了しました～

プロローグ～BLAZBLUE編～（前書き）

ついにとち狂った作者ですが、暖かい目で見て下さい

プロローグ～BLAZBLUE編～

～Side　三人称～

『あれから、もう12年も経つのか……』

銀の髪を伸ばした女性が独りでに呟いている

『ふっ、私もずいぶんと平和ボケしていたようだな』

そう言うと、手に持っている赤い双剣を消した

「……もう、行くのか？」

突然、フードを被った猫（？）が彼女に話しかけた

『獣兵衛か……？』

銀髪の女性はフードの猫……『獣兵衛』というらしいに言った

「ああ。何、少しだけ心配だったのでな……」

『ふっ、そうか……』

――その場に沈黙が下る……

その時、銀髪の女性が話し出した

『あの“黒き獣”を封印し、私が“人間”で、なくなったあの日か

ら12年、ついに“テルミ”が動き出した』
『私は、あの時の一人として、戦わなければなるまい』
「しかし――」
獣兵衛が、何かを伝えようとしたとき、彼女がそれを止めた
『それに――――』
『私の元・生徒が危険にさらされているからな』
「ふっ、そういえば、お前はそういう奴だったな……」
「ならいい。絶対に守ってこい！いいな！？」
『言われなくても、そうするさ』
――『第十三階層都市カグツチ』
そこへ、異端の六英雄〈イレギュラー〉が向かって行った……
「頼んだぞ……“アルト”」

～Side Out 三人称～

プロローグ～BLAZBLUE編～（後書き）

これからもレイチェルをよろしくお願いいたします

キャラ設定～ＢＬＡＺＢＬＵＥ編～訂正ｖｅｒ（前書き）

訂正しました

キャラ設定～ＢＬＡＺＢＬＵＥ編～訂正ｖｅｒ

名前
『アルト・リハインテッッド』

性別
『女』

年齢
『実は不老ふ「女性に年齢を聞くのはよくないぞ？」』

身長
『１７０ｃｍ』

体重
『別に言わなくてもいいだろう？』

Ｆａｔｅ式ステータス

筋力　Ａ　　魔力　ＥＸ

耐久　Ａ　　幸運　Ｂ

俊敏　Ａ　　宝具　Ｅ～ＥＸ

宝具リスト

・アークエネミー“レイバティン”
ランクＡ　対人、大軍宝具

普段はかなり小さい粒子であり、アルトのイメージによって形作られる。
そのため、数に制限はなく、まさしく無限に射出したりできる。
外見は赤い双剣であり、その剣で切られると、ずっと燃え続ける傷をつける

黒き獣　ランクＥ～ＥＸ　対神宝具

かつて、「第十三階層都市カグツチ」を混乱させた黒き獣の一部であり、謎の黒い何かで構成されている。
アルトはこれを、片手に纏わせて、相手の力を奪っていったり、翼のように展開して、相手ごと飲み込んだりする。
“対神”なのは、レイバティンと融合して、たとえどんなものでも、奪えるようになったため（それによって、アルトは不老不死になった）

性格

・基本的には、少し厳しいお姉さん的な感じ
しかし、相手を敵と見なした場合は徹底的に殺す

キャラ設定～ＢＬＡＺＢＬＵＥ編～訂正ｖｅｒ（後書き）

これからもよろしくお願いいたします

Ｓｔａｇｅ１（前書き）

どうしても、文が短い上に、駄文になってしまう

基本的にアーケードのストーリーを元にしているため、実際のストーリーと違うところがあると思います

Stage1

Side～アルト～

『……ここに来るのも、久し振りだな』

―第十三階層都市『カグツチ』――

第十階層目に、私はいる……

『ん？あいつは……ヴァーミリオンか？』

近くに見知った人影が見えたため、そちらに向かうことにする

『やはり……間違いはないようだな』

ヴァーミリオンの奴は、どこか気が抜けているからな

『おい、ヴァーミリオン！返事をしろ！』

「は、はいぃぃぃ！」

少しだけ、怒鳴ってやると、すぐに驚くのは、変わっていないみたいだな

「って、この声ってアルト教官ですか？」

どうやら、私だと気がついたようだ

『ああ、久し振りだな、ヴァーミリオン』

そう言ってやると、ヴァーミリオンがこちらに駆け寄って――

「アルト教官！！」

飛び込んで……って！！

『お、おい！少し落ち着……』

わあぁぁぁぁぁぁぁ！！

『……全く、少しは落ち着かんか！』

「す、すみません。教官」

あれから少しして、ようやくまともに話せるようになった

『しかし、あのおっちょこちょいなヴァーミリオンが、よく少尉まで上がれたな』

「うう、おっちょこちょいじゃないです！」

そうは言ってもなぁ……

『少し物を運ぶだけなのに、ぶちまけてくれたのは、どこのどいつだと思っているんだ？』

「あうぅ」

…おっと、つい話込んでしまったみたいだな

『さて、ヴァーミリオン、お前に伝えなければならないことがある』

「へ？」

そうだ

『……これから、私と戦って貰うぞ！ノエル・ヴァーミリオン少尉！』

それだけ言うと、アークエネミー“レイバティン”を取りだし、ヴァーミリオンに突きつけた

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～アルト～

Ｓｔａｇｅ１（後書き）

これからもレイチェルをよろしくお願いいたします

次回、戦闘回になると思います

Ｓｔａｇｅ１～戦闘パート～（前書き）

戦闘パートって難しいです

Ｓｔａｇｅ１～戦闘パート～

Ｓｉｄｅ～三人称～

「いきなり何言ってるんですか！？教官！」

彼女、ノエルはとても驚いていた

昔、世話になっていた恩師にいきなり武器を突き付けられたら無理はないだろう

『ふっ、私相手に話す余裕があるのか！ノエル！』

それだけ言うと、アルトは自らの剣を片方、相手に“投げつけた”

Ｓｉｄｅ～ノエル～

剣を投げてきた！？

「くっ」

いきなりの行動に少し反応が遅れた

あ、危なかった～

『……よそ見していていいの、かっ！！』

「嘘っ！」

教官がわずかな隙をついてこちらに向かって来ている

焦ったら負ける！

「オプティック・バレル！」

これで、体勢を崩せば――

『甘いぞ、ノエル！』

そう言って教官はジャンプして避けた……

って！

「そんな避けかたってありなんですか！？」

『ふっ、殺しあいにルールなどないだろうが！』

で、でも空中にいるなら避けられないはず

「こ、これな『隙を見せるな！』――へっ」

気がついたら、目の前にたくさんのレイバティンが――――

「え、えぇ～～」

な、何でレイバティンがあんなにたくさんあるの！？

「はぁ、はぁ、はぁ」

な、なんとかよけきれたけど

は、反撃しなくちゃ！！

次は教官に近づいて、連続攻撃を食らわせる！

「行きます！チェーンリボルバー」

ガッ、ガガガガガガガ

『くっ、なかなかやるようになったな！ヴァーミリオン！』

『だが――』

教官が、何かを言っているけど、うまく聞こえない……

でも、これで終わり！

教官から少し距離をとり、フェンリルを取り出す

「零銃・フェンリル！うぉぉぉぉぉぉぉっ！」

たくさんの弾が教官に向かって飛んでいく

『ちっ、数が多い。間に合うか？』

そう言うと、教官はレイバティンをしまった

『見せてやろう！異端の六英雄の力を！』

そう言うと、背中から、黒い何かでできた翼ができた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～ノエル～

Ｓｉｄｅ～アルト～

まさか、黒き獣（コイツ）を使うことになるとはな……

『ふふふ』

「？どうしたんですか？教官」

『いや、強くなったものだな。ヴァーミリオン』

そう言うと、ヴァーミリオンの奴は拗ねたように

「私だって、一応卒業してるんです！」

と言ってきた

『ああ、そうだったな。これなら――』

大丈夫だろう。

だからこそ、ここで

『行くぞ、ヴァーミリオン！』

『ブラット・イーター！』

背中の翼が変形し、狼のような口が出現する

グルル……

『これで……！』

さよならだ！

ガァァーッ

「き、キャァァァァァァ！！」

そして、口がヴァーミリオンを飲み込んだ

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～アルト～

Ｓｔａｇｅ１～戦闘パート～（後書き）

いつもになく駄文になってしまいました

Ｓｔａｇｅ１～終了パート～（前書き）

相変わらずの駄文です

Ｓｔａｇｅ１～終了パート～

Ｓｉｄｅ～アルト～

『ふっ、所詮この程度だったのか？ヴァーミリオン』

今、目の前には“誰もいない”

『……そこで見ている奴、出てこい』

「おやおや、見つかっちゃいました？」

そこに現れたのは、緑色の髪の黒いスーツを着た男だった

『ふん、こいつは本当にマスターユニットなのか？“ハザマ”』

ハザマの奴は、少しおどけたように

「ええ、確かにそうなんですけどねぇ？」

と返してきた

『なら、こいつは違ったのかも知れんな。一旦戻ったらどうだ？』

「ええ、そうさせて貰いましょうかね。では、マスターユニットを発見したら、連絡してください」

そう言うと、ハザマの奴は何処かへ行った

『……』

『さて、そろそろ大丈夫か？』

そう言って、背中の翼からヴァーミリオンを“出す”

「教官！いきなり何をするんですか！？」

……むぅ

『そう怒らないでくれないか？別に、悪意があってやった訳ではないんだが？』

「ふぇ？」

私がこう言うと、ヴァーミリオンの奴はわからなかったのか、呆けた声をあげた

『全く、少しは考えてくれないか？』

「そ、そんなこと言われても……」

だんだんと言葉が弱くなっていってしまった

しょうがない、説明してやろう

『ふぅ、まずお前にいきなり武器を突き付けたのは、これから先、お前が生き残れるかの確認』

『次に、レイバティンの数が多い理由だが……。』

「一体、あれって何なんですか？数が増えるアークエネミーなんて聞いたことないですよ！？」

やはり、気になるようで、こちらを真剣に聞きに来ている

『まぁ、落ち着け。あれは、簡単に言うとアークエネミーとしてではなく、“私”というアークエネミーから取り出された“パーツの一部”のようなものだな』

「それって、おかしいんじゃ？」

『質問は後だ。そして最後に』

これは、ヴァーミリオンも知らなかっただろうがな

『何故かお前は“ハザマ”の奴に狙われている』

「へっ？何でハザマ大尉が私を？」

『それは私も知らん。……が、奴がさっき戦っていた所に来たため、わたしの翼に隠れてもらった訳だ』

そう言って、背中から翼を出す

「あ、それであの時翼を使ったんですね！」

『そうだ』

どうやら、私がヴァーミリオンを飲み込んだ理由はわかってもらえたらしい

『しかし、よくここまで強くなったな』

そう言って、ヴァーミリオンを抱きしめる

「は、恥ずかしいですよ～。教官」

ヴァーミリオンは、照れて顔を赤くしている

『ふふっ、いいじゃないか。私から抱きしめるなんて滅多にないぞ？』

「うう～（嫌だって言えない自分がいやだ～）」

『……さて、私が伝えたいことは伝えきったな』

「こほん！教官はこれからどちらへ？」

復活したヴァーミリオンが私にそう尋ねてくる

『何、簡単なことだよ』

「簡単……ですか？」

ああ、簡単なことだろうな

『少し、馬鹿弟子の様子を見に行くついでに、いろんな奴に会う予定だけだからな』

「馬鹿弟子って……」

ヴァーミリオンの顔がひきつっている

……そこまで変なこと言ったか？

『では、またな！ヴァーミリオン』

「あ、はい！教官もお元気で」

そう言って、ヴァーミリオンと別れた――――

『そうだな、また会えるよな？ヴァーミリオン』

そう言いながら、先を進んで行った……

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～アルト～

Ｓｔａｇｅ１～終了パート～（後書き）

やっとＳｔａｇｅ１が終わりました

Stage2（前書き）

相変わらずの駄文ですがよろしくお願いします

Stage2

Side～三人称～

アルトがノエルと別れてから、少したったころ――

「へへーん、これなら早くつくし、獣兵衛様にも、褒めて貰えるかも！」

金に近い髪色をした少女が、機嫌良さげに歩いていた

「さーて、急ご急ごっと！」

「（で、でも。アルトさんに黙って出てきて良かったの？ルナ）」

「むぅ。いつもセナはアルトさんアルトさんって言って～」

「（だ、だって～）」

「とにかく！早く行くぞ！」

そう言って、彼女は駆けて行ってしまった

Side Out～三人称～

Side～アルト～

『さて。あの馬鹿弟子は一体何処に行ってるんだ？』

さっきから、いろんな場所を探しているが、見当たらない

『ふぅ、少し休むとする――――』

休もうとした所に、見慣れた姿を見つけた

『……何故、あいつがここにいるんだ？』

……とりあえず、追うとするか

三十分後、ようやく捕まえた

『全く、何故こんな所にいるんだ？“プラチナ”』

そう、ここにいたのは獣兵衛が面倒を見ているはずの少女がいた

「うう……見つかった……」

「（だからアルトさんには伝えたほうがいいって言ったのに……。ルナの馬鹿）」

「うるさーい！ルナは悪くないぞ！こんな所にいるアルトが悪いんだ！」

……ほぅ

「だいたい、セナだって最初は賛成だった癖に！」

「（そんなこと言われても……）」

『ほら、喧嘩は止めろ。どうせ――「「アルト（さん）は黙ってて（ください）」」

……こいつら……

『……いい加減にしろよ？ルナ、セナ』

「「は、はいいいいいっ！！」」

少し殺気を込めて言うと、二人とも（肉体的に言えば一人）大人しくなる

『武器を出せ』

「へっ？」

なぁに、簡単なことだ！

『少し、わがままお嬢さんにはお仕置きが必要なようだからな』

そう言って、プラチナにレイバティンを突きつけた

Side Out～アルト～

Ｓｔａｇｅ２（後書き）

次回は戦闘パートです

Ｓｔａｇｅ２～戦闘パート～（前書き）

テスト期間で遅れました

Ｓｔａｇｅ２～戦闘パート～

Ｓｉｄｅ～アルト～

「（ま、まずいよ～。ルナ、どうするの？）」

「そんなの……」

そう言って、プラチナは自らのアークエネミーを起動し、こちらへ向けてきた

「ぶっ飛ばしても、押し通る！」

「（えっ、ええ～）」

ほう……

『なるほど、そんなにやられたいのか？ルナ！セナ！』

「（ひぃ！）」

少し脅しを込めて、強く言うと、セナ“だけ”は怯えたみたいだ

「……」

対するルナの方は、とても静かだった

そのとき、プラチナが再び、こちらにアークエネミーを突きつけてきた

「……気に入らない！」

『ん？何を言っているんだ？』

「気に入らない！何で、アルトがいつも獣兵衛様の隣にいるんだ！」

……はぁ！？

『お、おい。何を言って――――』

「獣兵衛様の隣にいるのはルナだ！！そこは譲らない！……のに」

「何で、アルトが隣なんだ！？だから、気に入らないんだ！」

……なんだ。用はただ嫉妬しているだけか……

「だからぶっ飛ばす！覚悟しろ！」

ふっ、まぁいいか……

『ならば、私を倒して見ろ！ルナ！』

「行くぞ！“マミサーキュラー”！！」

プラチナが、ハート型に変形したアークエネミー“無兆鈴”に乗ってこちらに攻撃してくる

『確かに、威力はあるようだが……』

それを軽く回避する

『少し動きが単調過ぎるぞ！』

突進攻撃をかわされ、体勢が崩れているプラチナに、レイバティンの連撃を叩き込む

ガガガガガッ！！

「うぅ。まだまだ！」

「（やっぱりアルトさんってかっこいいなぁ～）」

「セナ！真面目に戦え！」

『おいおい……』

どうやら、セナのやる気はないらしいな

『ならば！これで終わりにさせて貰う』

レイバティンを普通の持ち方から、“逆手”に持ち変え、一瞬でプ

ラチナに接近する

「しまった！」

『気付くのが遅い！』

これがレイバティンの力だ！

『“紅竜一閃”』

ヒュッ　ズバッ

プラチナに近づき、すれ違い様に切り裂く……

『……悪いな…。これが勝負というものだ、ルナ。』

そう言ってその場から去ろうとする

しかし、背後から突然、ミサイルが飛んでくる

『っ！？』

慌てて背後を見る

すると

「ま、負けるかぁ！」

「（ル、ルナ！大丈夫！？）」

そこには、あちこちが焦げていながらも、立ち上がりこちらを見ているプラチナがいた

『……何故、そこまでするんだ？』

気がつけば、声に出ていた

「だって……アルトに勝てば、きっと獣兵衛様だって認めてくれるから……」

そこまで獣兵衛のことを思っているのか……。ルナは一途だな

しかし！それと私の敗北は意味が違う！

『だが！私とて異端とはいえ、六英雄の仲間と共に戦ってきたんだ！たった十年と少ししか生きていない小娘に負けるつもり等、毛頭にない！』

そうだ！私は“まだ”負ける訳には行かない！

『来るがいい。プラチナ＝ザ＝トリニティ！いや、ルナ！』

『私にお前の全力を見せて見ろ！』

「うわぁぁぁぁぁ！“シャイニングレイアードフォース”！！」

プラチナのアークエネミーの形が変わり、こちらに先端を向ける

そして、極太の閃光が発射され、こちらを飲み込んでいった……

Side out～アルト～

Ｓｔａｇｅ２～戦闘パート～（後書き）

これからもよろしくお願いいたします

Ｓｔａｇｅ２～終了パート～（前書き）

今回は、かなり短いです

Ｓｔａｇｅ２～終了パート～

Ｓｉｄｅ～三人称～

プラチナが砲撃をして、しばらくした……

「う、うーん。ここは？」

「（あっ、ルナ！ようやく目覚めた！）」

どうやら、プラチナが目を覚ましたようだ

「あ、あれ？そういえば、アルトはどこ？」

「（……ルナがぶっ飛ばしたんだよ？）」

「うーん。まぁいいや！じゃあ、ルナの勝ちってことでしょう！」

『ああ、そうだな』

突然、プラチナの背後にアルトが現れた

「う、うわっ！びっくりしたなぁ」

『ふふふっ、それはすまない』

「……ところで、アルトは認めてくれる？」

今までとは違う態度で、プラチナがこちらに聞いてくる

『ああ、これからはお前が獣兵衛を支えていくんだぞ』

「……うん！」

それだけ言うと、プラチナはどこかへ行ってしまった……

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～三人称～

Ｓｉｄｅ～アルト～

『ふふっ、全く落ち着きのないやつだな』

そう言って、プラチナが去って行った方向を見る

ズキッ！

『グッ！』

突然、痛みだした右腕を確認する

『やはり……』

右腕には、亀裂が走り、黒い“何か”が溢れ出していた

『もう少しだけ、耐えてくれ……！』

崩壊しかけた右腕をぶら下げながら、本来の目的地へ向かって行った

Side　out～アルト～

Ｓｔａｇｅ２～終了パート～（後書き）

次回から、一気にキンクリするため、ＢＬＡＺＢＬＵＥ編はかなり短くなると思われます

これからもレイチェルをよろしくお願いいたします

Ｓｔａｇｅ３（前書き）

久しぶりの投稿です。

今回から、急展開＋ご都合主義＋駄文の三大要素が強くなっていきますので、注意してください

Stage3

Side～アルト～

さて、ここで待てばあいつは来るだろうな……

「ちっ、急がなきゃいけねぇってのに、ジンの野郎……」

どうやら、目的の人物が来たようだな

『待っていたぞ！馬鹿弟子！』

「うげっ！師匠じゃねーかよ！」

『全く、それが師匠に対する態度か？馬鹿弟子！』

「ちっ！退いてくれ！師匠。俺はテルミの奴に用があるんだ！」

そう言って、目の前の人物は押し通ろうとする

『悪いが、今のお前を行かせる訳にはいかんな。馬鹿弟子。いや、ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジ！』

そう言って、私はレイバティンを2つ作成する

「なら、無理にでも押し通らせて貰うぜ、師匠！」

そう言って、ラグナは自らの武器であるブラッドエッジを構えた

ガッガガガガガガガ

「ちっ！やっぱり師匠に小細工は通じねぇか」

『当たり前だ！』

そう言って、私はレイバティンを無数に作り出した

『これでも喰らっておけ！ラグナ！』

手で、剣群に指示を与える

『“赤式・乱れ牙”！』

ラグナに向かって、無数の剣が飛んでいく

「クソッ。よりによってこの技かよ！」

そう言って、ラグナは危なげながらも、ギリギリ回避していく

『ほう、避けきったか』

「当たり前だろ、いつも食らってたまるか！」

…ほう？

ずいぶんというようになったな？

『全く…。確かに、実力は以前より上がったようだが、それだけで喜ぶのは早いんじゃないか？』

そう言った後、自身の右腕を“黒いナニカ”で纏わせていく

「っ！それは！」

ラグナはこれが何かわかったようだ

…だが

『反応するのが遅い！』

既に、自身の右腕は黒い狼の頭の形に変わっており、すぐにでも攻撃することが可能だった

『まぁ、運がなかっただけだろう？

…安心しろ、痛みは感じんよ』

『“黒式・暴食の蠅王”！』

「っ！？ヤベェ！」

ラグナは、なんとか回避できたようだな…

「っち！このままじゃ、らちがあかねぇ！」

そういうと、ラグナはいつも通り、剣を逆手に持って、腰を少しだけ落とした

『（…なるほど、すぐにでも終わらせたいようだな）』

はっきり言うと、これからラグナがするであろう行動は読めているだが…

『（乗ってやろう！その“純粋な力勝負”にな）』

ラグナの構えにあわせて、こちらも“全く同じ体勢”をとる

「っ！」

どうやら、ラグナは気がついたようだな…

『行くぞ、ラグナ！』

「ああ！」

『「“カーネージシザー”！」』

同じ構えのまま、相手にぶつかって行った…

「…師匠、なんで最後にあんなことしたんだ？」

地面に倒れ込んでいる私に対して、ラグナが問うてきた

…結果は、わかると思うが、私の圧倒的敗北で終わった

『それよりも、早く先に行かなくてもいいのか？』

「っ！畜生、後で絶対ぇ聞きに来るから、待っててくれよ！？」

それだけいうと、ラグナは先へと進んで行った……

『…行ったか……』

やはり、こういったことはどうしても苦手だな…

『さて、私も行かねばなるまい』

そう言って、私はフラフラしながらも、ゆっくりと先へ進んで行く

『…くそっ！せめて、持ってくれよ？』

そう言って、私は“崩壊し始めた右目”を抑えて、言った

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～アルト～

Ｓｔａｇｅ３（後書き）

次話でＢＬＡＺＢＬＵＥ編が終了する予定です

Ｓｔａｇｅ４（前書き）

遅れてすみませんでした！

今回でＢＬＡＺＢＬＵＥ編は終わりです

Stage4

Side～アルト～

震える足を無理に動かし、最上階へ向かっていく

『くっ、やはりそろそろ限界か……』

すでに、右目を中心にどんどん崩壊し、そこからは、黒い“何か”が溢れだしていた

『……だが、せめて成すべきこと位はおわらせるさ』

そうしているうちに、最上階へ着いたようだ

ガキッ！バキッ！ドシャッ！

『この音は、まさか！』

震える足を更に奮起させ、最後の階段を駆け上がる

そこには、地面に膝をついているラグナと、それを見下しているハザマがいた…

『クソッ！ラグナ、無事か！？』

「おやおや、ここに何の用ですか？アルトさん？」

『テルミっ！』

いつの間にか、ハザマがこちらへ近づいていた

「まぁ、そんな顔しないで下さいよ？」

「せっかくいいとこだったんだ、邪魔してんじゃねーよ！」

急に、ハザマの雰囲気が変わる

『ああ、ならば私が代わりに戦ってやるさ…』

「なっ！師匠、あんたじゃ無理だ！」

やはりというか、それに反応したのはラグナだった…

『何、無理はせんよ』

それだけ言うと、ラグナから離れていった……

「本当に良かったのかよ？」

『まさか、貴様から心配されるとはな……』

「ちっ、まぁいい。もう少しで“第１２素体”が完全に復活するからな」

やはり、こいつは解っていたのか……

『ならば、ここで貴様を倒させて貰う！』

「おらおら、さっきまでの威勢はどうした？アルト！」

『くっ！』

体が思うように動かない！

「喰らいな！“蛇翼崩天刃”！」

『っ！しまっ……』

反応が遅れ、はるか上空へ打ち上げられる

『ガッ！』

ドシャッ、という音をたて、地面に叩きつけられる

「おいおい、だから言ったろ？アルト」

ハザマが何かを言っている……

「中身が出かけてるお前が、俺に勝てるわけねーだろうがよ」

それだけ言うと、ハザマはラグナの方へ向かって行った……

『させるか……』

もう、この身体は持たないだろう…

すでに身体の半分以上が崩壊し、黒い“何か”になっている

『（だが……）』

もし、ラグナが敗れれば、誰がノエルを助けるのだ……

今現在、ハザマを倒せるのは、ラグナしか居ない

ならば、私は悪あがきをさせて貰うだけだ！

そして、残った部分を“自ら”崩壊させる

瞬間、ヒトガタのそれは不気味な異形へ姿を変えた

『グアアアアアアアアッ！（後は任せたぞ、ラグナ）』

Ｓｉｄｅ～ラグナ～

「ちっ、まさか！黒き獣を解放しやがったな、アルト！」

突然、テルミとの戦いの間に、黒い何かが割り込んできやがった！？

『……』

そいつは、テルミを見ると、狂ったように戦い始めた…

「この！獣風情が！」

しかし、段々と色が薄くなっていってやがる

このままじゃ、消えるのも、時間の問題じゃねーか！

『……！』

「おら！消えちまいな！“アルト”！」

なっ！こいつが師匠だと！？

「クソッ！何でそこまですんだよ！師匠！」

つい、きいてしまった

その時、師匠（らしい何か）がこちらを向いた

そして、少しだけ微笑むと、フワリと消えてしまった……

「ククッ、これで後はてめえだけだぜ？ラグナちゃん？」

「テルミ！てめえだけは、ぜってぇ倒す！」

あの時、なんとなく、師匠が俺に『任せたぞ』って言った気がした

……

なら、負ける訳にはいかねぇよな！

「テェルミィィィ！」

このあと、どうなったのかは、その場にいた何人かしか知らない

だが、このあとは“正しい、然るべき流れ”になるだろう……

……それにより、世界から弾かれた“コレ”をどうしたものか……

ＢＬＡＺＢＬＵＥ編、終了

Ｓｔａｇｅ４（後書き）

次回から、ネギま編に入ります

Stage Final

Side～アルト～

……頭が痛い

身体の感覚が掴めない…

ここは、一体？

《ふむ、目覚めたかね？》

お前は誰だ？

そう言おうとするが、声が出ない

《私が誰であるか……か》

《ふむ、だが、私が誰であるか等、大したことではあるまい？》

ああ、確かにな

《だろう？》

《貴様が知りたいのは、何故生きているのかであろう？》

ああ、私はあの時に、テルミによって原型を保てなくなる位まで攻撃を食らったはず……

《まぁ、簡単に言うと私が貴様を呼び出したのだよ》

呼び出した…だと…？

《ああ、貴様にはやって貰いたい事があるからな》

ふっ、もはや死を待つのみの私にやって貰いたい事……か

《ああ》

しかし、それはできないだろう…な

《確かに、“肉体”がなければ出来んな……》

そういうことだよ…

《ならば、その肉体を用意してやればいいだけのことだ》

何をバカなことを……

『そんなの出来るわけ……っ？！』

何故か、肉体が存在していた

《ふむ、少し色々付け足させて貰ったが、まぁ問題あるまいよ》

『ふっ、これも貴様の予想通りと言ったところか？』

《然り》

《そういえば、まだ名を名乗ってはいなかったな》

《我が名は“　　”》

《人々からは“根源”等と呼ばれている》

『“根源”だとっ！？』

《然り》

『……ならば、何故根源と呼ばれる貴様が、私を頼る必要があるのだ？』

《ふむ……》

《もちろん、理由はある》

《まずは、私自身は物語に介入することは不可能だからだ》

『何故？』

《私という存在は、あらゆるものの始まりであり、神の領域に等しきものだ》

《それ故に、一つの世界に入れた場合、世界の容量と呼ばれるものが耐えきれず、世界が崩壊する》

『なるほど……。力が強すぎるのも良くないと言うことか……』

《まぁ、そういうことだ》

《次に貴様を選んだ理由だが……》

『ん？どうした？』

《……まぁいい。簡単に言わせて貰おう》

《簡単に言うと、貴様はどの世界にも存在しないある種のバグのようなものだからな》

『なん……だと？』

《確かに衝撃的だろうが、事実には変わりない》

『何故！』

《貴様はテルミという奴に“簡単に”敗れ、この世界に来たのだろう？》

『あ、あぁ』

《それはつまり、貴様に対する修正力といったものが働いた結果だよ》

『っ！？』

バカな！

私は、バグ等ではない！

《諦めよ、それが事実だ》

認めなどしない！

そうだ！

『私は私だ！』

『今まで生きてきた私の記憶はしっかりと残っている！』

《……なるほど》

《やはり、私が貴様を選んだのは間違いではないようだな》

『……』

《私は今まで何体ものバグを見続けていたが、ここまでしっかりとしたバグは見たことがない》

『……だとしたらどうする？』

《やはり、改めて貴様に頼みたい事がある》

『……』

《バグではなく、アルト・リハインテッド個人にだ》

『……私は、まだ貴様を信用した訳ではない』

《それは理解している》

『……聞くだけなら聞いてやるさ』

《……済まない》

『いいから話せ、まずはそれからだろう？』

《……ああ》

《まず、世界の容量については解るか？》

『聞いた限りだと、力が強い奴だと、その分容量を食う位しか解らんが……』

《簡単に言うと、世界とはそれぞれの流れのようなものがあり、基本的にはそれに従うように時代が進むようになっている》

《その物語の主要人物を中心に周りの世界が変質していく》

《英雄の物語ならば、その英雄を中心とした、いわゆるファンタジーだったり、戦争物だったりするわけだ》

《しかし、物語は決して一つではない》

《いくつもの可能性、その数だけ物語は存在する》

『……その話と、世界の容量の話と関連性が浮かばんのだが？』

《ふむ、確かに“存在するだけ”なら関係はない》

《しかし、その物語を何らかの手段で知り、自らの死後に“転生”とやらをする人間もいる訳だ……》

『“転生”だと……？』

いまいち理解できんな……

《まぁ、無理もあるまい》

《さて、話を戻すが、世界の容量とは、その転生を望む人間を入れられる範囲を示す値だ》

『……？』

《だが、世界の容量にも限界はある》

《転生を望む人間……まぁ、仮に“転生者”としよう》

《この転生者が多ければ多いほど、容量が減っていく》

『それがなくなったら？』

《その世界の崩壊が始まってしまう》

『何故だ？例え転生者が増えたとしても、そこまで容量を減らすものではないだろう？』

《ただの人間なら、問題はないが、大体の転生者はいわゆる“神”によって異様な力を得ているのだ……》

『……救えんな、それは』

《そこで頼みたいことに繋がるわけだ》

《簡単に言えば、貴様には転生者を始末する私の代行者になってもらいたい》

『……』

私は……

……あれから、私は話を受けることにした。
今では、二人の妹達に、頼りになる仲間達がいる。
だが、迷いはしない。
私は、私の成すべきことをするまでだ。
「アティ姉様！早く来て！」
『ああ、わかった。すぐに行くさ』
名前は、代行者になった時に捨てた。
今は……
『私の名は、アルティシア・ブリュンスタッド』
根源の代行者であり、真祖の長として
転生者を滅ぼそう

Ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｅ　Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ

Stage Final（後書き）

次回からようやくネギまの世界に入ります

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1777t/

黒き獣を纏いしもの、魔法先生の世界へ

2011年11月17日21時38分発行